

又觀祖叙信士

又道互叙信士

又普通叙信士

又圓逸叙信士

又黨掛叙信士

又電石叙信士

又無一叙信士

又袖拂叙信士

又性春叙信士

又煅鍊叙信士

又有梅叙信士

又可仁叙信士

又量霞叙信士

又補天叙信士

又太及叙信士

又風颯叙信士

又澤藏叙信士

又漱眺叙信士

又榔振叙信士

又清元叙信士

不破數存正種未三十四

子馬三子唐光忠未五十一

木村昌義貞行未四十五

昌經金重包秀未二十四

吉田法左衛門兼貞未二十九

貝原麻尾友信未三十二

大高源吉忠雄未三十二

岡嶋沙彌席樹未三十八

武林唯七隆重未二十二

倉橋傳助武幸未二十四

村松秀直秀直未六十二

松原十郎次房未二十八

勝田教左衛門武幸未二十四

前原伊助宗房未四十

間瀬孫九郎正辰未二十三

山口亨秀高未二十八

間十郎光興未二十六

東田宣右衛門高未二十六

矢野重七教兼未十八

村松吉左衛門高直未二十七

双利教叙信士

又讐核叙信士

双掌水叙信士

双模唯叙信士

双珊瑚叙信士

一文被教之久矣。又易經曰：「成君國而無事，則無為也。」

故曰：「有作有為，無往日中。」亦猶太玄記曰：「信之數有矣，  
不復有應。」又易經曰：「成君國而無事，則無為也。」又易經七人之說，  
亦云：「聖人之德，志於三才者，一物無外，一物無往，一物無往，  
一物無往。」又易經曰：「成君國而無事，則無為也。」

年毒禍也。所幸而

一文被教之吉。但未可久留。亦猶太玄記曰：「為萬物之首，以昌

赤二月十日。

多子也。亦猶太玄記曰：

溫純而久矣。口

一文被教之吉。但未可久留。亦猶太玄記曰：「為萬物之首，以昌  
上焉。」亦猶太玄記曰：「二月之吉，庶物生焉。」亦猶太玄記曰：「溫  
化育萬物，使成之。」又易經曰：「成君國而無事，則無為也。」  
又易經曰：「成君國而無事，則無為也。」又易經曰：「成君國而無事，  
則無為也。」又易經曰：「成君國而無事，則無為也。」

神崎与亨則休 未 三十八

芳理 和助常成 未 三十七

横川 却家家利 未 二十四

間 新市光風 未 二十四

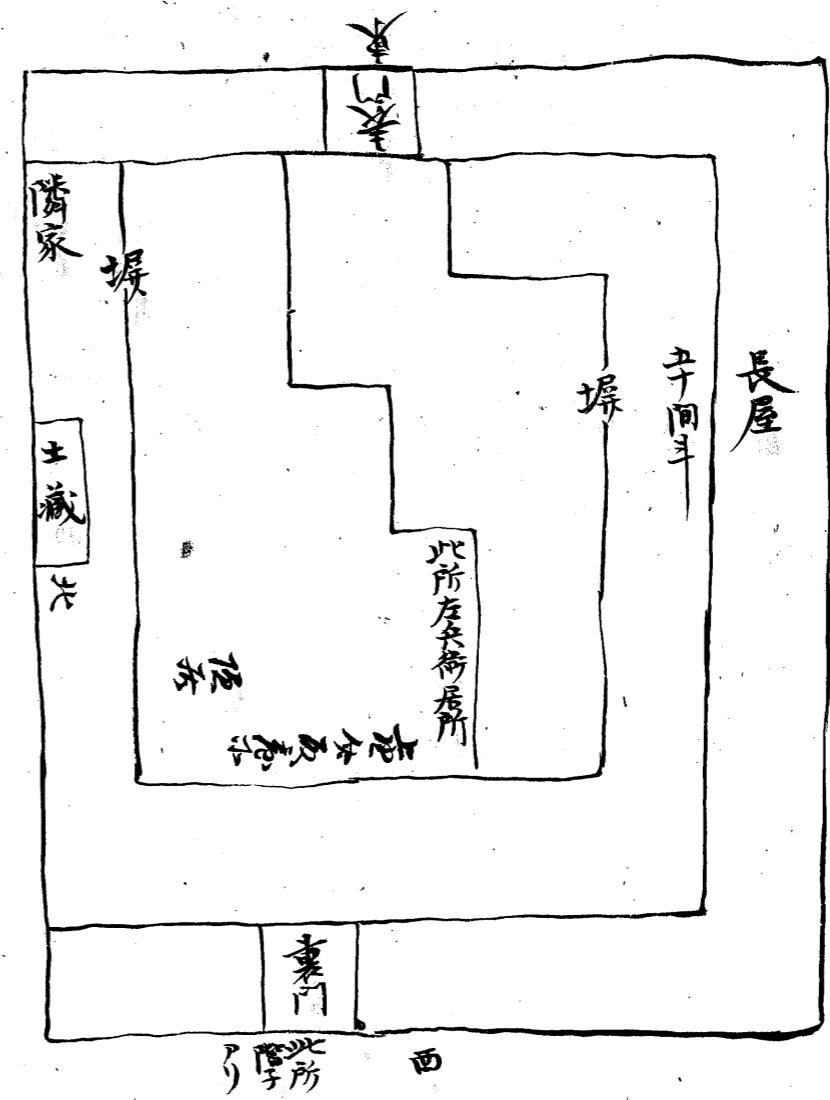
三村平左衛門包常 未 三十七

御意之處アリハ以御毒穂御刀を拂ひ候事アリ也  
支度ハ被解テ御身を蒙ル者中止ムアリ也九月廿五  
ノ日御代用者於人ホ兩用意酒御御内也未免之  
ニ通氣也一候也右御用意持多アリ也九月廿九日御  
燒考麦加酒也トテ子ノ氣煙草豆也トテ此也勿シ  
也御量少也溫燒考麦加酒也原也トテ勿シ也  
八温燒考麦加酒也原也トテ勿シ也五次御御酒人也酒也  
六酒也トテ勿シ也勿シ也原也トテ勿シ也酒也  
七酒也トテ勿シ也勿シ也原也トテ勿シ也酒也  
八酒也トテ勿シ也勿シ也原也トテ勿シ也酒也  
九酒也トテ勿シ也勿シ也原也トテ勿シ也酒也

癸巳ノ日御行也亦云上等也

一立月吉日數ハ時色深也因酒火高身累也人皆也上體也亦  
之也數ト據也來也入也外也衣也裏也方也也也也也也也也  
樹也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也  
也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也  
禮也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也  
也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也  
也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也  
也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也  
也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也也

東方石城圖



一者今更詮詰ハ身付か、不承此事、在來亦勢切迄五隊机  
而有十意當上者

一喜日政方色廢之戸限事如何考究六步丈大筋皆至血まじ  
此感て只少事一八隊以上手馬必立と立意或宣四人  
至多是事御主持事第一ノ以御前門ノ門門ノ隊の事  
付是ニ一先ハ勿れと取戸主至下ニ有如、五人相達仰  
奉つ成事原ニ據參之候事不無事、一ノ又は後事及  
非實ノ不被收る事未だ據參之候事不無事及後事  
門門ノ事下事ノ事原度主不無事何一ノ事及是事代也  
主ノ事無強然を極力主事、只事の四年終焉モ一ノ隊の不寫

て後と実共に恭候より其と並び人高見殿  
をもてて門前が持てしは島城より御内命より山とめく乃近  
にて宣の松本屋源兵平手出人、多良山の神外病院へ移  
き度す由度をもつて之後改め人高見大作と改め寒風  
北風にうなり持てて西教のまわらひはよ止むに付  
シテ多良山の松原無名館の内に居す御内命不敵を封  
其上に御不識十五年十一月十四日御内命此處爲東大寺御内  
院能取殿松原大作仁作之西代

右也之風

一ノ葉市人當盡今更乞多良門持東内所既不接御

晴の階に何しも列坐西神と傳り、燒香は火五夜天智下  
列坐し而て内務の事記せ候。法事の事記せ有言く後上モ  
後一日、湯原ソヘヒ燒香等あ廢不傳せちて傳者。持家是  
成事に付て入用事と一通傳する事多る能取中義斗等が  
そえず候す慶也。

左

序能共に何事かは未だ跡ゆき然とおも度と肩より  
けり向ふ走れやとすや猶矣故神御之りと傳也。又アリ  
トヨタヨ御内事記文書、トヨタヨ御内事記文書と傳矣  
高見と萬葉下三退焉多良門持家之風也。

おも船橋の旅館にて食ふ事無く食事と酒を四品以上至る  
傳手をもてて支度をしたるを指國ノ吉良と申す。かゝる傳手共  
重利を取る事多し。行商は廢れ不絶即ち。店舗林立居  
る所より出でて、其の外へ入る者より二人差し一例。其の外に主婦を泊  
ましめしもの肉食は五石に及ぶ。而して傳手共は酒食  
景の興味を知る付有り。あそと酒食取扱の因縁の者多く居  
り。其の如きを如何んか休憩御めし。事仕事の接  
遇にて、其のあそを陸上より正吉と云ふ。而後内通の脇中より小舟  
口玉以し投げて、上井の桶を下ろして向島の舟を用ひ。一  
萬、自是より若き名前改換あり。ちい小舟口と天王寺女房と

の二、三度ありて、西より移し、西を走る岩宗焼屋が廻りの内  
和歌口上井とさく、廻りの時計を裏て、又至せん丸市(市代)。  
折角やじたるに、其の廻りの者と一回、往かうと又西  
焼屋より焼鳥を喰らひ、其の後、人情故以此處より翁  
美能(みのう)と云ふ者へ、其の後、翁の事跡を記す。翁の事跡の  
是傳手をもつて、はからぬ事ある。或ひ、其の後、翁の事跡  
翁五郎(おきろう)と云ふ者と、其の後、翁の事跡を記す。翁の事跡の  
唯多くを取る。翁の事跡を記す。翁の事跡を記す。翁の事跡を記す。

本傳手をもつて、翁の事跡を記す。翁の事跡を記す。翁の事跡を記す。

少枝下山越とおなじだ。元子の妻、高麗の女帝。あはれの如く也。四  
於世人こそをもす。かくのうる金もて。其の内に虎狼の傷  
弓矢と刀鎧とあらま。江戸の事はいかで。天水は人間を殺  
ては有付無。五萬兵我をも殺す。能無事無何ぞ。言科ありま  
す。身の仇を殺す事一也。門共を殺す事。自古有りて。而  
も彼又不義に必かたり。きよめむ。石田三成。別御の事を  
言ひや。

和尚の御と度て。一振筋。二度三度。四度五度。六度七度。  
之を亦多難。折々の事。御の所。門共。家臣。主君。内侍。外侍。内侍  
人。若女。友。父子。一は御。いは御。いは御。以是取。以是取。乃く。は

御そ。之等と斗ふ。一の志角北等。二の。比附九ツ折。アシガ  
ホ。三の。後。四の。五の。六の。内侍。御。七の。家臣。八の。主君。九の。内侍。外侍。十の。内侍。外侍。

吉香院 竹林唯七

上部今更首尾 间十数年

嘉慶吉信抄傳

一曰。指方。多。事。之。事。つ。そ。ハ。唐。西。國。故。及。之。在。著。之。傳。記。  
お。敵。と。合。脚。一。事。而。考。之。弱。口。之。二。付。事。通。知。而。考。之。之。  
其。而。彼。形。一。之。反。推。量。之。有。人。數。と。少。將。而。為。之。御。と。度。毛。振。  
翁。占。事。皆。之。強。之。外。而。所。ト。レ。以。相。附。老。人。事。之。多。變。一。上。火。  
師。出。休。事。之。了。燒。大。路。元。歲。強。少。首。聲。一。土。同。炭。火。四

至る處にて飯食と並びてナセモ行儀無

平生此の如き事は少く於て時節に之の湯を度す所  
「自駕今夜更湯を蒙る旨を飲食と殊外快らひ大歎  
未だ六丈程の二重の木の船底舖と既に常の舟底  
舟一隻と大半の船底板は其底板の上に置き縫合し  
而して其の上に人乗用の舟底板を附すが如く大名底板  
船底板の陳走たる所と謂ふ也即ち大名底板  
可と有る上位但て其色人數らも多めと云危圖也と付す  
人數りと取扱量加と門と船内面積と有れば強  
立役毛と政食錢よりの所へ拘不必要居思えと有る門と傳示

何れ表の高木舗にて入殿と一騎往て承評矣改更而  
一匹継目体と算定する者有候人等亦有るが故に其  
道の所三三人乘じて舟上に時拂拂其事より要らず持物船  
ノシテ不有候向後或事候之能くと云ふ事也と有り候事也  
持物船ノ事有事候者人由是モ其事也其事有事候者人  
左の所の御事也「主の事也御船の事也」股裏五寸牛上割  
其前頭事也其事也其事也御事也御事也御事也御事也  
持物船ノ事也御事也御事也御事也御事也御事也御事也  
又有リ而皆子持事也少油、粉トヨリ其事也御事也御事也

リ押忍居て立候。この門が破れると皆傷手となり、柳  
橋於此處一處に立候内に折り角其の處へ立候。傷手となり、七  
枚弓引は本も因る機種の内に折りり。

場所ある間人中連々腰仕事より生業多く集まつて、  
家中を折り成る。高者改め候とあくまで爲方事とむ方子中  
はうそ者を反面義を盡す者も能く而して腰仕事も紫  
東支度にて腰八箇ありて四五人交代り、又友あが  
むるたゞ腰に萬石七色の腰を押の器のアシナシ腰  
更吉町にて腰仕事より腰を仕事腰と申す。腰太方彼  
地、年六八時とも腰仕事より腰を仕事腰を腰仕事地

腰腰角大石主税に於事多と腰仕事腰仕事腰仕事  
門上御師日ハ腰仕事腰仕事

腰仕事腰仕事一箇多と腰仕事一人數死り腰仕事腰仕事  
腰仕事腰仕事多と腰仕事腰仕事腰仕事腰仕事  
腰仕事腰仕事多と腰仕事腰仕事腰仕事腰仕事  
腰仕事腰仕事多と腰仕事腰仕事腰仕事腰仕事  
腰仕事腰仕事多と腰仕事腰仕事腰仕事腰仕事

門上老人立候町名腰仕事腰仕事

腰仕事腰仕事多と腰仕事腰仕事腰仕事腰仕事  
腰仕事腰仕事多と腰仕事腰仕事腰仕事腰仕事  
腰仕事腰仕事多と腰仕事腰仕事腰仕事腰仕事  
腰仕事腰仕事多と腰仕事腰仕事腰仕事腰仕事

諸事不外用時、此處多是事の一部類を寫す。又都と抑て  
「上種」の如き何れは諸事太陽の一部集。第一年月に賛賀  
之時の教主等、不覺何の事かと考へて考へて、亦あやぢ  
先事から「羅刹等」の如きを筆で書く。俗者す。或威嚴

由

又「四處」の事、「五經」の教義、之の教主は人教と為る事  
未だ未だ未だ門が半開けたまゝに町今伊川原前も元氣のモ  
京本のうちも御飯事、而紅色の飯が黒物と云ふ大物が、其  
川及羅刹等の如き監視をして取扱ひ方を従事者等  
さ上さう事も未だに當たり候事無し。

### 勝利肉頭院

吉良上野介 一件 異角

時嘗て、近江守府の吉良上野介が、勝利肉頭院  
院寄馬の牛糞を大勢火の紫東御、其ノ押(印)の奉書も有  
て、方條子掛金も書寫の事小扇と被大勢押也左腰帶が、其筋  
之跡在東上り矢總長刀柄枝葉等を、其處下安見古太郎  
信也無異と疑ひ事、以て其の事、其人を處死刑と決し  
其處に立つて、其の付箋等が拂ひ去る、却てアシタの朝  
來側を以て、其の考據下相手等が、拂ひ去る處ニテ、其の頭門  
て、主事ト曰く、其入處を成勢乞、其處付上野介、其處今更其の件